みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

島を「楽園」に変えたポリネシア人

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 印東, 道子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5493

島を「楽園」に変えたポリネシア人

印東道子

一八世紀後半、イギリス王立協会によって南太平洋へ派遣されたジェームズ・クックは、のちにポリネシアとよばれる数々の島を「発見」したことで知られる。そこには王を頂点とした厳しい階層制をもつ社会が発展し、見事に統率された生活が営まれていた。美しい女性の踊りや男性たちの格闘試合、大量の食糧による饗宴などでもてなされたクック一行は、「南海の楽園」とも形容される優雅な生活を楽しんだのである。

当時のポリネシア文化はいわゆる「新石器文化」に相当する。金属こそなくても、あまり手をかけずに食糧生産を行う農耕システムを整え、多様な芸術を生み出す社会的環境を作りあげていた。この豊かな「楽園」世界は、ポリネシア人が創り出したものであって、決して最初から「楽園」だったわけではない。

ポリネシアへの移住

人類がはじめてポリネシアに足を踏み入れたのは、今から約三〇〇〇年前。日本では縄文時代晩期にあたる。ポリネシア西端のサモアやトンガでは、突然のように人間が居住しはじめた証拠が見つかる。人間活動が認められる最古の文化層からは、ラピタと名付けられた精巧な刺突紋を施した土器（図1）や多様な道具類、装身具類などが見つかり、人間とともに島に渡ってきたネズミや家畜（イヌ、ブタ、ニワトリ）の骨も混じる。最初の移住者たちは東南アジアの熱帯島嶼環境で暮らす知識や技術をすでにもっており、多様な文化要素を携えて東へと

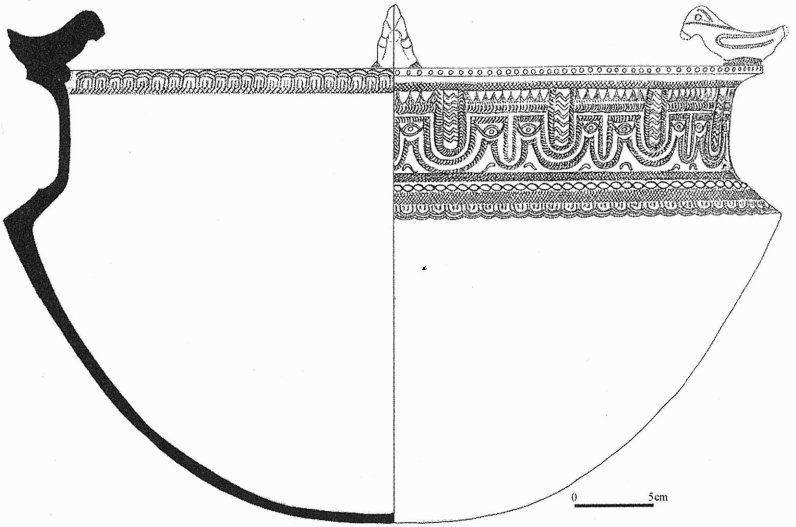

図1　精巧な刺突紋を施したラピタ土器（ヴァヌアツ出土、Bedford & Spriggs 2007より）

移動してきたのである。

サモア以東の島々への移動も、今から約一〇〇〇年前に突然のように行われた。それまでは無人島だったタヒチやハワイ、ニュージーランド、イースター島などを次々に植民し、一部は南米大陸にまで到達した（図2）。南米原産のサツマイモが、ポリネシアの主要な島々で栽培され、クック諸島で見つかった一〇〇〇年前の炭化したサツマイモがその導入の古さを物語っている。

狩猟から漁労へ

人間の手の入っていない島は決して暮らしやすい環境ではない。オセアニアの島にはもともと哺乳類がほとんどおらず、狩猟生活のみで居住を継続するのはむずかしい。食糧残滓の変化を調べると、居住初期は、鳥骨が占める割合が非常に高く、魚骨の量は相対的に少ない。海に囲まれた島環境でも、人間の狩猟対象は陸上動物が優先するらしい。

人間の居住後、一〇〇年ぐらいのうちに鳥骨の割合が激減する。現在は島にはいない鳥骨が多く見つかるので、乱獲が行われたことがわかる。鳥の骨が減少するにつれ

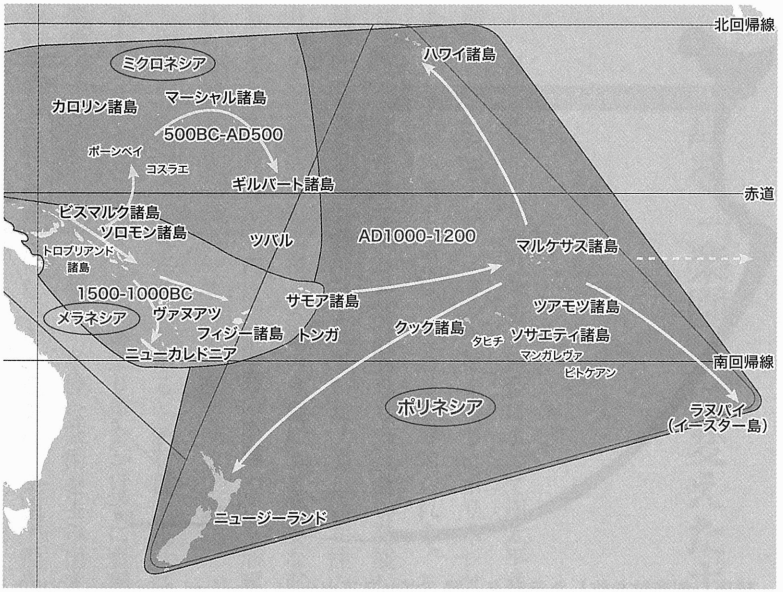

図2　ポリネシアの島々と人類の移動図

て増加するのは魚やウミガメの骨で、最終的には飼育されたブタの骨がこれに加わる。家畜は単なる食糧ではなく、社会的饗宴の場で共食するための重要な役割を担うが、イースター島やニュージーランドのようにブタが欠落した島もある。日常的には海洋資源が主要なタンパク源となっていった。

農耕と環境改変

遺跡には残らないが、栽培活動も平行して行われたことが、土中に含まれる花粉の変化からわかる。人間が居住を開始すると同時に森林が減少し、日当たりのよい場所に生える草本類が急増する。土中には、大小の炭化物も人間が居住するとともに混入しはじめる。焼き畑農耕や調理によって生じた炭である。新しい耕作地には、東南アジアから携えてきたり移動してくる途中で入手した、食用植物（タロイモ、ヤムイモ、パンノキ、バナナなど）や有用植物（樹皮布用のカジノキ、染料用のウコンなど）が植えられ、食糧生産の基盤を作っていった。

もっとも多くの島で主食として栽培されたタロイモは、穀類とは違って栽培に季節性がなく、収穫したその場で

イモの一部を埋め戻せば植え付けも完了する。クック諸島のタロイモ水田の風景など、まるで東南アジアの稲作水田を見ているようであるが、収穫間際の大きなイモと植え付けたばかりのイモが隣り合って栽培されているのが特徴だ。また、パンノキはいったん植えてしまえば巨木となり、数十年間にわたって、毎年、数百個の実をつける。何の手入れも必要なく、実がなったら収穫するだけ、というまさに楽園向きの植物である。これらに加え、飲み水になるココナツやカロリーの高いコプラをはじめ、様々な生活用品の素材を提供するココヤシの重要性は言うまでもない。

このように、食糧生産の基盤をしっかりと築いた島では、人口が増加し、統制のとれた社会が発展した。トンガやハワイ、タヒチなどの階層社会がそのよい例である。

芸術性

金属をもたないオセアニアでは、島で入手できる様々な素材を利用して道具や装身具類を作り出していた。シンプルな機能美をもつ実用品に対して、首長や神官の持ち物や衣装は、社会的地位や特殊性を際だたせるために目をひく装飾を施したものが多い。装飾の差異化は階層社会を支える役割も担っていたからである。

一例として、タヒチの首長からクック船長に贈られた奇妙な葬儀用の衣装を紹介しよう。大英博物館などに実物が保存されているが、大阪の国立民族学博物館にも等身大の精巧なレプリカが展示されている（図3）。これは、高位の者の葬儀に際して葬儀長が身につけたコスチュームである。ひときわ目をひく顔面をおおうマスクは、大きな真珠母貝と放射状に配した海鳥の尾羽を組み合わせたものだ。胸をおおうプレートは数百個の真珠母貝製パーツを結び合わせたもので、背後には鳥の羽毛を貼り付けた樹皮布製のケープをまとっている。手には真珠母貝製のカスタネットとサメの歯を埋め込んだ杖をもち、死霊を村からあの世へと送り出すのに用いる。島で入手できる素材を組み合わせただけであるが、なんとも威厳を感じさせる芸術性の豊かな衣装である。

「楽園」の条件

ポリネシアの島はどこでも「楽園」になれたかというと、そうではない。「ミステリー・アイランド」とよばれ、

図3　タヒチの葬儀長の衣装（国立民族学博物館提供）

のは、比較的大きくて土壌の肥えた島が多かった。

ただし、キャリングキャパシティは、人間の暮らし方で変化する。本来の自然林を畑に変えて食糧を調達すれば、キャパシティは上がる。しかし、その結果として生じる土壌流出で植物生産量が低下すれば、キャパシティは下がる。ポリネシア人は人間活動と自然とのバランスをうまくとりながら、自分たちの島を「楽園」に作りあげたのである。

現代のポリネシアには、本来のキャパシティをはるかに超える人口をもつ島が多い。海外から食糧などを輸入し、観光客や島外で出稼ぎする人がもたらす現金がそれを可能にしている。グローバル世界に飲み込まれつつある「楽園」は今後どのように変わっていくのだろうか。今後も「楽園」であり続けられんことを切に願っている。

（いんとうみちこ・国立民族学博物館教授）

石積みの祭壇など、人間が住んだ形跡が残されている無人島も見つかっている。なにが人間居住を拒み、なにが楽園づくりを成功させたのだろうか。

個々の島にはキャリングキャパシティ（人口支持力）がある。その島でどれくらいの人間が暮らすことができるかという目安である。ミステリー・アイランドの大多数は、キャリングキャパシティがもともと低い島である。それに対して「楽園」と呼べる豊かな社会が形成された